

科目名	開発研究入門 ＜2017年5月20日（土）・21日（日）／名古屋キャンパス＞	2単位
担当者	吉村 輝彦	
テーマ	開発研究に関わる基礎的理解と修士課程での学び	
科目のねらい	<p>＜キーワード＞ 開発研究、研究方法、フィールドワーク、修士論文、ネットワーキング</p> <p>＜内容の要約＞ ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論を習得する。合わせて、学習法ガイダンスなどを通じて、修士課程における学習の仕方、修士論文に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解する。 ・日頃はインターネット上で学習を進める院生にとって、この科目では、院生同士が直接の「顔合わせ」を行う機会でもあり、今後の研究活動やWEBを通じたコミュニケーションの円滑化を図り、また、ネットワーキングをする。</p> <p>＜学習目標＞ ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論の基本的な事項を理解できる。 ・修士課程における学習の仕方、修士論文に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解できる。</p>	
授業の進め方	<p>本科目では、開発研究に関わる基礎的理解を図る講義と合わせて、リサーチ指導教員による研究指導や新入生の相互交流などネットワーキングを通じて、修士課程における調査研究の円滑な導入や促進を図る。</p> <p>本科目は、2017年5月に集中講義形式で二日間にわたり終日行う。2016年度のプログラムを参考までに以下に示す。2017年度に関しては、構成を変更する可能性もある。</p> <p>2016年5月28日（土） 09:15-09:30 オリエンテーションと自己紹介（吉村輝彦教授） 09:30-10:30 講義「大学院での学びと研究」（雨森孝悦教授） 10:30-12:00 講義「論文の書き方」（野田直人教授） 12:00-13:00 昼休み 13:00-13:50 講義「社会調査入門 データのとらえ方、見方」（千頭 聡 教授） 13:50-14:50 講義「私の修論経験」 15:00-17:50 各リサーチ担当教員（指導教員）による研究指導 [リサーチ別の教室へ移動] (18:00- 懇親会)</p> <p>2016年5月29日（日） 09:15-09:45 昨日の振り返り（吉村輝彦教授） 09:45-10:45 講義「私の研究テーマと方法：まちづくりをどのように研究対象としてきたか、そして、今後の研究テーマをどのように展望していくのか」（吉村輝彦教授） 11:00-12:30 ガイダンス「修士論文を書くということ」（吉村輝彦教授） 12:30-13:30 昼休み 13:30-15:00 院生による研究発表及び質疑応答 15:00-17:00 院生による情報交流・意見交換ワークショップ 17:00-17:15 まとめ（吉村輝彦教授）</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○修士論文に向けた論文計画の内容を確認し、必要に応じて、修正しておくこと。 ○指定したテキストを事前に読んでおくこと。</p>	
本科目の関連科目	「国際社会開発の基礎」「研究方法論」	
テキスト	参考資料として、開発基礎論のテキストを、大学より配布する。	
参考文献		
成績評価方法と基準	全2日間にわたる講義へすべて出席することを前提として、事前学習（30%）、質疑応答への積極参加などの受講態度（70%）を総合的に勘案して評価する。	

科目名	国際社会開発の基礎	2 単位
担当者	穂坂光彦	
テーマ	そもそも開発(development)とは何か、に始まり、地域の開発に関わる基本課題や理論について、主として開発社会的アプローチから総合的に学ぶ。さらに開発ワーカーが地球市民として踏まえるべき南の国々(Global South)との関係について議論する。その意味では「開発教育の基礎」でもある。	
科目のねらい	<p><キーワード> 開発、開発教育、市民交流</p> <p><内容の要約> いわば「国際社会開発入門」として、国際開発・社会開発の対象についての視野を広げ、洞察力を培うことを目指す。さらに履修者が自身の視点を相対化し確認するのを支える。多岐にわたる内容－開発理論、人権、ジェンダー、障害、コモンズ、参加、連帯経済、民際交流など－について概観しながら、「そこで、自分は、何を、どう扱うのか」を考え、修士論文作成のための素材や方法について、ヒントを得てほしい。</p> <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際社会開発の基本的課題や基礎的理論を理解する。 2. 上記を踏まえて、履修者自らの修論研究や開発実践の方法を相対化し、自身のアプローチを確立する一歩とする。 	
授業の進め方	<p>下記のテーマについて、テキストを基に、その分析と討議を繰り返す。</p> <p>第1回 イン트로ダクション</p> <p>第2回～第3回 開発と「援助」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開発を学ぶということ 2. 「南」から見た世界：開発教育の視点 3. 「南」から見た世界：開発の視点 <p>第4回～第5回 開発における人権・ジェンダー</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 発展の権利 5. 「知」は誰のものか：グローバリゼーションと伝統的知識 6. ジェンダー分析 <p>第6回～第7回 福祉と開発</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. 福祉と「社会開発」 8. 障害と地域社会の開発 9. 居住福祉 <p>第8回～第9回 「南」世界の政治経済</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 人口の増加と移動 11. 都市インフォーマル部門 12. 構造調整援助 <p>第10回～第11回 開発の理論と政策</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 豊かさの指標 14. 計画観の転換 15. 支援的政策環境 (enabling policy environment) <p>第12回～第13回 地域の共同管理</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. ソーシャルキャピタル 17. マイクロクレジット 18. コモンズの現在 <p>第14回～第15回 社会参加と民衆交流</p> <ol style="list-style-type: none"> 19. 参加型アプローチ 20. オルタナティブな経済 21. 民際交流の行商人 	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>与えられたテキストを読み、自分がコーディネーターを務めたい講と、指定ディスカッションを務めたい講とを決める。担当の講の冒頭に、論点の提起を行う。</p> <p>履修者は、予めテキスト該当箇所を読んで議論に参加するのはもちろんであるが、関連して各自の現場での経験、参考データや文献、新聞やインターネットの情報などを進んで紹介し、かつ批判的に検討して議論を深める。</p>	

テキスト	穂坂光彦編著『国際社会開発の基礎』2017年度版（当研究科オリジナルテキストを事前配布する）
参考文献	テキスト内に記載。かつ適宜指示する。また関連資料(reading assignment)を研究科掲示板に掲載する予定なので、各自ダウンロードすること。
成績評価方法と基準	掲示板ディスカッションへの量的・質的参加度（70%）と提出レポート（30%）により評価を行い、全体で60%以上を合格とする。

科目名	研究方法論	2 単位
担当者	小國 和子	
テーマ	研究における問題意識を具体化し、フィールド調査への筋道を立てる	
科目のねらい	<p><キーワード>リサーチクエスション、フィールドワーク、仮説生成プロセス、質的調査と「客観性」、</p> <p><内容の要約> 本科目では、フィールドワークを中心とする質的調査の方法論と実践上の具体的な課題について理解を深めることを目的とする。特に、身近な開発実践を事例化して調査、考察する上で考えられるバイアスの軽減や、求められる姿勢の獲得について取り上げたい。 他者の現実を聞き取り、分析し、書くという行為においては、調査者が自らのもつフィルターに自覚的になり、調査の質を保つことが必須である。また、統計資料などをうまく併用しながら、データとしての有効性を確保することが求められる。 本科目を通じて、研究・調査活動に際してもとめられる調査者としての姿勢や、質的調査の実践に必要なエチケットやマナー、技術を獲得し、修士論文執筆の準備を進める一助としてほしい。</p> <p><学習目標> ・初発の関心を理論的にも社会的にも意味あるリサーチクエスションへと発展させ、自らの修士論文における「問い」を見出す事が出来る。 ・聞き取りや参与観察など、質的データを主とするフィールドワークの具体的な方法を学び、実践することができる。</p>	
授業の進め方	<p>全体的なスケジュールは以下のとおり、テキストの各章を2週間毎に議論してゆく。また、後半は、課題レポートに対するピアレビューの議論を主に行う。</p> <p>第1回～第2回 主テキスト第1章、第2章。 第3回～第4回 主テキスト第3章「正しい答え」と「適切な問い」 第5回～第6回 主テキスト第4章 フィールドノートをつける 第7回～第8回 主テキスト第5章 聞き取りをする 第9回～第10回 主テキスト第6章 民族誌を書く 第11回～第12回 参考書(「講義案内」で紹介する文献より適宜選択)を巡る議論 第13回～第15回 最終課題レポートを巡る議論</p> <p>受講者全員が授業の作り手となる。基本的には、各受講者の分担によるテキスト発表によって授業を進めるが、各章の発展的な討議を重視し、必要に応じて講師の経験等を踏まえた事例の紹介を行なう。また、受講者各自が問題関心を積極的に開示して議論を進めていくことを期待する。 受講者が自らの研究テーマにおいていかなるフィールドワークが必要且つ可能であるかを考え、実践に向かえる手助けとなる実践的な議論をすすめたい。また、受講者のフィールドワークや業務の現状等に応じて、オンタイムで質疑応答ができるよう、授業の進行には柔軟性を確保したい。 尚、時間的な余裕と参加者の関心に応じて、主テキスト以外に、ほかの民族誌的研究やライフストーリー調査についての参考資料を授業開始時に紹介し、利用する予定である。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>・授業開始までに指定テキストを入手し、担当を希望する章を検討しておくこと。 ・「講義案内」で紹介している参考文献情報を読み、質的調査やフィールドワークに関する基礎知識がない場合は、積極的に入手して読んでおくこと。</p>	
テキスト	<p>佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法:問いを育てる、仮説をきたえる』、新曜社。 本書は、いわゆる社会調査方法のマニュアル本ではない。著者は、フィールドワークを「ひとつの調査技法であるだけでなく世界認識の方法でもある」と捉え、実践する私達の視点の持ち方、インフォーマントとのかかわり方から、得た情報を「書く」という作業の意味までを説明している。 各章には著者自身の実践経験から得られた明快なメッセージがちりばめられ、フィールドワーカーとしての読者が、自らの実践をレビューしながらデータをまとめ、エスノグラフィーを執筆するまでのプロセスを辿りながら必要箇所を参照できるようになっている。</p>	

参考文献	小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治(2011)『支援のフィールドワーク:開発と福祉の現場から』、世界思想社。 対象集団や社会を理解する事を目的とする調査で行なわれる「問いかけ」「うなずき」「関心を持ち続ける」「共感を示す」「ありのままを受け止める」といった行為が、支援する側—される側という非対称的な関係に縛られがちな開発や福祉など「支援の場」においてどのようなアクションとなるのか。その可能性と課題について、具体的なエピソードを通じて紹介している。
成績評価方法 と基準	別途「講義案内」で詳細を提示するとおり、原則として、掲示板での発言・発表・コメントの書き込み(60%)と、最終レポート(40%)によって成績評価を行ない、総合評価60点以上を合格とする。

科目名	社会調査とデータ解析	2 単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	社会調査の基本的な考え方や統計学の基礎を理解したうえで、多変量データの解析手法を学び、量的分析を行えるようにする	
科目のねらい	<p><キーワード>科目内容に関するキーワードを、5 つ程度記入する。 量的調査 社会調査 統計データ データの収集と解析 多変量解析</p> <p><内容の要約> 地域社会開発を進めるにあたって、対象とする地域の社会経済的なデータの収集と特性把握、地域住民の意識構造の把握・分析などを行うことは、重要な支援ツールとなる。本科目では、地域住民の意識構造を把握するための社会調査の基本や留意点、各種統計的なデータの収集と統計的な分析手法などについて述べる。特に、地域開発の分野で役立つ多変量データの解析手法（分散分析、重回帰分析、因子分析、数量化Ⅰ類～Ⅲ類など）について紹介する。</p> <p><学習目標> 1 社会調査の基本的な考え方、調査方法、解析方法などについての基本を学び、自らの課題に応じた調査設計ができるようになる。 2 地域開発の分野で利用可能な多変量解析手法の目的や解析結果の読み方が理解でき、自らの課題に応じた手法の取捨選択ができるようになる。</p>	
授業の進め方	<p>第1回～第2回 データ解析の基本（データの見方、基本的な解析方法、既存の統計など） 第3回～第6回 社会調査法 （調査方法概論、調査票設計上の留意点、調査結果の集計・分析方法など） 第7回～第12回 多変量解析 （分散分析、重回帰分析、数量化Ⅰ類、判別分析、数量化Ⅱ類、因子分析、数量化Ⅲ類 など） 第13回～第14回 演習 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○社会調査（アンケート調査）については、自分の関心があるテーマに関わる調査票設計の簡単な課題を課す。また、多変量解析手法の適用イメージについてのレポートも課す。 ○指定したテキストを自主的に読むとともに、積極的に質問することを期待する。</p>	
テキスト	岩淵千明他「あなたもできるデータ解析の処理と解析」福村出版、2600円	
参考文献	関連する論文を配布予定	
成績評価方法と基準	2回のレポート（50%ずつ）により評価する	